
僕たちのつくる時間はほのぼの。

忍者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕たちのつくる時間はほのぼの。

【Nコード】

N8588E

【作者名】

忍者

【あらすじ】

僕たちが作っていく大切な時間。特別なことが起こるわけじゃない。でも大切。特別に大切ってわけじゃないでしょ。むしろ、身近にあるとあると思うんだよ、大切って。自分が気づかないくらい身近にね。

第一話 仲良し時々グサリな一言

「お前ってさあ、どこに住んでんの？」

「ん。ほのぼの荘」

今は、高校の昼休み。

あんパン片手に親友と雑談してるところ。

「ほのぼの荘ってデパートの近くなの？」

「うん」

「デパートの近くかあ。略して、『デパ近』だな。」

勝手に略してるアホはその親友の祐二。
実際、学力はふつうだけ。

「もうすでにあるからその略し方。『デパ地下』で」

「あつそ」

おい。

「で、そのデパ近で一人暮らしなん？」

「うん。なかなか辛いよ一人暮らし」

「からいん？」

「つらいの！」

『からい』と『つらい』は両方とも『辛い』って書くけど、会話中にその間違いは無いだろ。

「何が辛いん？」

「んー。キムチ」

「おもろないぞ」

「さっきの祐二だってイマイチだったよ。」

「しかたないわ。作者がつまらんやつだからな。てゆうかゴミニ」

ドンマイ、作者。

「って、ドンマイって何を略してるんだっけ？」

「真面目に答えてほしいか、笑いがほしいか、どっち？」

真面目に知りたかったけど、どーせ祐二は知らんからいいや。

「んー。笑い」

「鈍器 マイクロバス」

単語並べただけじゃん。

「あんまり、面白くないよ」

「作者がつまらん人間なもの」

あ、作者が泣いた。

あんパンを見てふと思いつく。

「あんパン発明した人ってすごいよね」

「どうした？急に」

「だってさあ、パンにあんこだよ。あんパンを知らん人にとっちゃ、どんな組み合わせだよ！って言いたくなくならない？僕らがご飯に生クリームかけるもんだよね……って聞いている？祐二っ？」

ぼーっ、と空をみてる祐二。熱く語ったのだから、しっかり聞いてほしい。

「聞いているよ」

ほんとかよ。

「つまらん話を」

「すこしストレート過ぎだとおもうよ、いや。かなり」

それが祐二のいいと……

「まだセミの鳴き声聞いているときの方が楽しいわ」

……じゃないね。

きーんこーんかーんこーん

「あと五分で昼休み終わっちゃう。さっさと教室もどろつよ」

「ああ。そだな」

ちなみにここ屋上ね。

勉強したくないなあ。もうちょい、祐二とのんびりしてたいよ。なんだかねだ、いっていい奴だし。

「さっさとしろ。ボケ」

前言撤回。

はあ、今日もいい天気だなあ。

うーん、と僕は伸びをする。

ふと、祐二が既にいらないことに気付いた。

「あれっ！？祐二はっ！？」

きーんこーんかーんこーん

「うおっ!!」

チャイムが鳴った。

五時間目開始のチャイム。

ちなみに現在地は、やはり屋上。

「僕って、お茶目」

.....。

自分で言ってみて寒くなっちゃった。

教室に戻るかな。

第二話 妹との空腹な再会

「恵けい。お腹減ったよ」

「知らん。草でも食ってる」

どうも、第一話からでてたけど名前が出てこなかった恵です。ちなみに、空腹を訴えてくるのは僕の妹で小6の飛鳥あすかです。

僕は一人暮らしです。なのになんで妹が入り浸っているかのとくと。

約一時間前

僕が部屋で暑さと闘っている時のこと。

ぴんぽん。

あれ、誰だろ？珍しいな。僕はそんなことを考えながらドアを開ける。

「やつほー、恵」

そして閉める。

「まてまてまてまて!!おかしいから!!とりあえずなんかリアクシヨんとつとけよ!!」

普通につるさい。ご近所さんに迷惑だからドアを開けて対応する。

「とりあえず中に入って」

で、最初みたいになってるわけだ。

「で、何しにきたの?特に何も用がないのにこんな所に来るなんてことはないだろ?」

飛鳥は両手をパチンと合わせ、「あっ、そうそう」と何かを思い出したような仕草をする。

「あのさあ……」

「私もここで住むから」

.....。

「なんで?」

「父と母が仕事するのに都合が悪いからって」

僕の父と母は仕事のため家をよく出るから飛鳥の世話が出来ないかららしい。

ちなみに僕の一人暮らしの理由はいつか話すよ。って言っても、どこでもいいような理由だけだね。

「で？ここに住むよ。いいよね？」

「いやだ」

僕はキツパリと断言する。

「ファイナルアンサー？」

飛鳥はミリオ アのみのも たのようにジーンとこっちを見てくる。

「ぎーんねん。答えは『どうぞ、ゆっくりしてってください。飛鳥様』でした。っつーわけで住むから」

「いいよ」

「いいのかよ!?!」

「だって、嫌って言っても住むんでしょ?」

「そりゃそっただけだよあ、もうすこし粘らない?」

「うん」

「うわぁ〜、つまんねえ男だなあ」

むっ。言わせておけば、「ノヤロウ」。

ってゆうか、腹減ったな。

「腹減ったからそろそろ飯作るわ。なんか食べたいもんあるか」

「あなたの右手をミディアムレアで」

「グロいわ」

「じゃ、左手」

「同じや」

「コイツどんな教育受けてんだ？」

「じゃあ、オムライスがいいな」

「よし、じゃあ作るかー!!」

「あ、卵ねえ。つか、冷蔵庫ほぼ空だわ」

「えー。今、オムライス食べる気満々だったのに」

「じゃあ、買いもん行ってくるしかないなあ」

「そんなにも待てないよー」

文句が多い奴だなー。まだ一つ目だけど。

「今からなんか作れー」

あ、二つ目になった。

「できるか！調味料しかないんだぞ」

「うー。なんか食べれるものないかな……………あつたっ」

ん？なんか飛鳥がこつちをみてるぞ

「じーっ」

「自分で言っな」

飛鳥がみてるのは僕の右手あたりか。右手……………。

「まさか？」

「あなたの右手をミディアムレアで」

「グロいわ」

「じゃ、左手」

「同じや」

うーん。ほんと困ったな。なんかないかな？

あっ、そういえばあれがあつたな。

「カップラーメンあるぞ」

「誰がそんなもんだべるかっ!」

「じゃあ、僕だけ食べよ」

「ああっ、待って。今日はやっぱり我慢して食べるっ!」

「そこまでして食わんでも」

「だって、今日は8月18日だよっ」

「それがどうした?」

「嫌々食べようカップラーメンの日」

「勝手に作んなや」

「作るっ！！！！」

「死ね！」

「死ぬっ！！！！」

「違うから。ポジティブな方にもってけよ。んな自殺願望叫ばれても」

「それじゃ、ただのパクリじゃん」

「なんで、コイツはこんな無駄なところで真面目なんだよ。しかし、やるじゃねえかコイツ。そんな信念持つちゃって。」

「やるなあ、お前」

「でしょ？やはり、人のギャグを自分の物にするのは良くないとおもっの」

「そっだよ、そのとおり。でも『作るっ』も『死ぬっ』も、ちよつと変えただけで軽い盗作行為だと思っぞ」

「生きるっ！！！！」

「このタイミングで使うんかい。っーか、とうとう100%純粹な盗作かい」

「パクるっ！！！！」

「ぶつちやけ過ぎだ」

腹減った。そろそろ三分だし食べよ。
手を合わせて

「いただきます。」

「いただきます……って、あれ？私の分は？」

「準備してないよ。」

「なんで!？」

「いらん、って言ったじゃん」

「その後にいる、って言ったじゃん」

「時間切れってやつさ」

大人世界は時間に厳しいのさ。って言ってもまあ、僕はまだ高二のガキだけど。

「まあ、元気だせ。カッププラーメンぐらい自分で準備できるだろ。てゆうか、ポットつかえ。ボタン押すだけでお湯出るから……って聞いてないな」

「うゝー、絶対食べてやるからな」

「カッププラーメンをか？」

「あなたの右手をミディアムレアで」

「まだ使うんかい」

第二話 妹との空腹な再会（後書き）

8月18日が『嫌々食べようカップラーメンの日』っていうのは『嫌々』『いやいや』『い818』『8月18日』という訳です。

自分で作ったつもりですが元々あったものかもしれません。
の曰って無理矢理作ったようなのもけっこうあるらしいので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8588e/>

僕たちのつくる時間はほのぼの。

2010年10月13日09時50分発行